

平成27年度第1回伊賀地域高等学校活性化推進協議会議事録

開催日時 : 平成27年9月1日(火) 18:30~21:10
会場 : 県伊賀庁舎7階大会議室
出席 : 委員 杉浦礼子、谷垣幸次郎、岡森久剛、中谷幸雄、櫻井勝一、
清水和代、海野淳子、遊免昇司、古川一司、下猶茂樹、
野口俊史、上島和久、山田政普、和南義一、庭田佳典、
藤永博幸、東則尚、加藤幸弘、東直也(19名)
事務局 教育政策課長 宮路正弘、高校教育課長 長谷川敦子
教育政策課課長補佐兼班長 辻成尚
教育政策課 西達夫、宇陀和彦

事務局(司会)

皆様方におかれましては、ご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。ただ今から、平成27年度第1回伊賀地域高等学校活性化推進協議会を始めさせていただきます。

まず、本日の配付資料を確認させていただきます。事項書が表紙になっています配付資料が1冊ございます。2枚めくっていただきまして、資料1からのページ番号は、1ページから参考資料3までの38ページになります。よろしいでしょうか。

次に、別添として、「名張青峰高等学校が開校します!」というリーフレットを置かせていただいています。以上、2点の配付資料について、過不足等はございませんでしょうか。

なお、開催案内の文書でもお知らせしましたとおり、当協議会は公開で行っていますので、大きな会場を使用しています。また、議事録作成の関係から、ご発言はマイクを通していただきますようお願いいたします。

それでは、事項書に沿いまして進めさせていただきます。

「1 あいさつ」として、県教育委員会事務局教育政策課長の宮路正弘からご挨拶申し上げます。

1 あいさつ

事務局(宮路課長)

皆様、本日は、平成27年度の第1回伊賀地域高等学校活性化推進協議会に、ご多用の中、また、夜分お疲れのところ、ご出席いただきありがとうございます。当協議会は19名の委員で構成する協議会ですが、今年度新しく11名の方に委員をお引き受けいただきまして、本当にありがとうございます。新しいメンバーになったところで新たな協議をスタートしていきたいと考えています。

当協議会は、地域の有識者の方、保護者の方、学校関係者の方に委員をお務めいただき、平成16年度から設置しています。その中で、地域の県立高校のあり方についてご協議いただいていたところで、総合専門高校である伊賀白鳳高校の設置や、来年の春、平成28年度に開校します名張青峰高校の学校像等について、時間をかけてご協議いた

だいてきました。

平成25年度及び26年度については、当地域に中高一貫校を設けてはどうかという意見についてご協議いただけてきたところです。中高一貫教育校の設置については、人口規模等から見て難しいだろうという結論をいただいたところですが、今後も更なる少子化の進行等が予想されますので、地域の子どもたちが、これからはしっかりと高校で学んでいける環境づくりを進める観点から、引き続きご協力いただきたいと思います。

本日の資料としては、最新の中学校卒業生の進路状況であるとか、今後の中学校卒業生数の予測を用意しています。昨年度から引き続き協議する内容が多くありますが、今後とも伊賀地域の高等学校の活性化について、地域全体の視点でご協議いただきたいと思います。

なお、先ほども申しましたように、来春開校する名張青峰高等学校については、この協議会でもたくさんご意見をいただきながら、コンセプト等をつくってきたところです。その開校に向けた検討及び準備の状況についても報告させていただきますので、名張青峰高校の活性化について、今後ともぜひ、委員の皆様からのご協力、ご支援をいただきたいと思います。

簡単ですが、開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくをお願いします。

事務局（司会）

それでは次に、「2 自己紹介」に移ります。

事項書の次に委員名簿を掲載していますので、ご覧ください。

先ほどもありましたが、委員19名のうち11名の方に、本年度から新たに委員をお引き受けいただいています。恐れ入りますが、委員名簿の裏の座席表に従い、谷垣委員から時計回りで、また、時間の都合上、ご所属とお名前により自己紹介をお願いします。

2 自己紹介

※（省略）谷垣委員、岡森委員、中谷委員、野口委員、上島委員、山田委員、和南委員、東則尚委員、加藤委員、東直也委員、庭田委員、藤永委員、清水委員、海野委員、遊免委員、古川委員、杉浦委員の順に、自己紹介。

事務局（司会）

ありがとうございました。

なお、櫻井委員、下猶委員につきましては、間もなくご到着のことと思われます。続きまして、事務局からも自己紹介させていただきます。

※（省略）長谷川高校教育課長、宮路教育政策課長、辻課長補佐兼班長、西主査、宇陀主査の順に自己紹介。

3 会長・副会長選出

事務局（司会）

次に、「3 会長・副会長選出」に移ります。

事項書の裏の設置要綱をご覧ください。第3条の3に基づきまして、互選によりご選出いただきたいと思いますが、委員の皆様からご意見等ございますでしょうか。

ご意見がないようでしたら、事務局から提案させていただいてよろしいでしょうか。

（異議無しの声あり）

それでは、会長を引き続き杉浦委員に、副会長は東則尚委員にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（賛同の拍手あり）

ご承認いただきましたので、杉浦委員、東委員は、恐れ入りますが座席のご移動をお願いします。

（会長・副会長が座席移動）

事務局（司会）

ただいま下猶委員がご到着されましたので、一言、自己紹介をお願いします。

※（省略）下猶委員の自己紹介

それでは、杉浦会長からご挨拶いただき、その後の議事進行をお願いします。

杉浦会長

皆様、改めまして、杉浦と申します。よろしく申し上げます。

それでは、皆様のお手元の事項書に沿って、昨年度までの協議の経緯等について少しお話をさせていただきたいと思います。

昨年度は、まず1つ目に「地域全体の学科の適正な配置」、2つ目に「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援」、3つ目に「当地域における中高一貫教育の実施」について、これら3つの柱で年間4回にわたって協議してきました。その中で、長らく協議を重ねてきた「当地域における中高一貫教育の実施」については、「当地域に中高一貫教育校を設置することは難しい」と、まとめました。

しかし、「地域全体の学科の適正な配置」と「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援」の2つの項目については、密接にかかわる議題でもあり、引き続き協議する必要があるということで、昨年度までの協議では一定のまとめには至っていません。

先ほど事務局からの挨拶にもありましたが、委員19名のうち、11名の方が、本年度から新たに委員となっていたこともありますので、本日はまず、これまでの協議の経緯等について、事務局から簡単に説明を受けて、協議に移る前に共通理解を図っていききたいと思います。

次に、最新の中学校卒業者数の予測等、当地域の高等学校を取り巻く詳細なデータが、本日の資料として配付されていると思いますので、これらの資料について、事務局から

の説明を受けながら、本年度の協議の進め方等について、皆様と一緒に協議していきたいと考えています。また、事項書の協議事項にあるように、「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援」についても、皆様からぜひご意見をいただきたいと考えています。

いずれにしても、伊賀地域の子どもたちの教育・学習環境を整える観点、子どもたちの立場・視点に立って、活発なご意見をいただきながら、建設的な協議としていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

それでは、事項書に沿って進めさせていただきます。「4 報告事項」の「(1) これまでの協議の経緯等について」、事務局から説明を願います。

4 報告事項

(1) これまでの協議の経緯等について【資料1・参考資料1】

事務局（辻班長）

「これまでの協議の経緯等について」は、以前から委員をお務めいただいている方は、よくご存じのことかもしれませんが、新しく委員になられた方もたくさんおられますので、少し時間をかけて説明させていただきます。

まず、21ページの参考資料をご覧ください。当地域で、学校、家庭、PTA等の学校関係者や有識者からなる、このような協議会を開催しているのは、平成16年度からと聞いています。21ページからの参考資料1は、17年度の協議会として、平成18年9月にまとめられたものです。これを、簡単にまとめたものとして、25ページに図がありますので、その図をご覧くださいながら、説明していきたいと思っております。

この協議をしていた平成17・18年度頃は、図の一番左端にありますように、当地域には高等学校が8校ありました。ところが、その後、中学校卒業生数が減少していくと見込まれたので、その後の学校のあり方について協議が行われました。平成21年度から23年度頃にはどうなるかということについて、当時の協議会から、A案とB案が出されました。A案の方には3番目に「新普通科高校」と書いてありますが、その後も子どもたちの数が減少していくことから、A案ではなくてB案の方が採られました。B案の方には、「新総合専門高校」と書いてあり、これが平成21年度に開校した伊賀白鳳高校です。

伊賀地域の高校を6校とするB案が出てしばらく推移していましたが、その後も更に子どもたちの数が減少していくという予測を踏まえて、平成22年度から再び協議を開始しました。平成24年度から平成26年度については具体的なイメージ図は書いてありませんが、「普通科高校の再編」や「総合学科高校の再編」という言葉が書いてあります。この平成22年度から平成24年度にかけては、当協議会で時間をかけて協議するとともに、市民に対しても説明会等も開催して、平成28年の4月に名張桔梗丘高校と名張西高校を統合した新しい学校を設置するとまとめました。お手元には本日の配付資料の別添リーフレットがありますが、この平成28年4月に開校する名張青峰高校について、平成24年度にまとめていただきました。

また、この平成17・18年度当時の「再編活性化イメージ」の図には、さらに先を

見通して、平成27年度から平成33年度頃には、地域の高校が4校になるのではないかとこのことをイメージ化した図も載っています。この平成17・18年度時点から見ると、平成33年度というのは、まだ0歳児にあたる年度ですが、生まれた子どもの数から考えると、これぐらいの中学校卒業生数で、高校としては4校ぐらいになるのではないかとこのイメージ図です。このイメージ図は、将来像を決めたものではありませんが、地域の子どもの数が減ったら、そのようになっていくのではないかとこのことをイメージ化したものです。

ここで、資料を戻っていただきまして、1ページの資料1をご覧ください。最初の「平成24年度までの経緯」という部分に、先ほど、参考資料1のイメージ図でご説明したことが文章で書いてあります。当協議会を平成16年度から設置して協議し、3校を統合して新総合専門高校を設置することを、平成18年9月にまとめました。「少子化が進む平成27年度から33年度頃には伊賀地域の県立高校が4校程度となることをイメージ化した」ことが第1段落に書いてあります。

第2段落には、平成22年度に協議を再開したこと、保護者や市民等を対象とした説明会を開催したこと等が書いてあります。第3段落には、平成24年度まで協議の結果として、「平成28年4月に名張桔梗丘高校と名張西高校を統合して普通科をベースとした新しい高校を設置し、両校の良さを継承・発展させるとともに、広い視野とコミュニケーションスキルを身につけ、地域や世界で活躍できる人材を育成すること等を、協議のまとめとした」と書いてあり、これが来春開校する名張青峰高校のことになります。

平成25・26年度については、会長の挨拶にもありましたように、3つの項目について協議しています。まず、1つ目は、「地域全体の学科の適正な配置」について協議しました。今後、さらに子どもたちの数が減少していく中で、特に伊賀地域では普通科の割合が少ないのではないかとこの意見をいただき、地域全体の学科の適正な配置について協議しました。

2つ目は、「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援」についてです。発達障がいなどを含む特別な支援を必要とする子どもたちが、伊賀地域の高校で学ぶことができていないのではないだろうかという意見をいただき、協議してきました。

3つ目は、「伊賀地域における中高一貫教育の実施」についてです。伊賀地域、特に名張地域から津方面への進学が多い状況があることを踏まえ、伊賀地域の子どもたちが伊賀地域で学べるように、伊賀地域に中高一貫教育校を設置することも一つの手段ではないかとこの意見をいただき、このことについて協議してきました。

これら一つひとつの項目について、「平成25・26年度の協議の概要」として、協議会における意見をまとめてあります。(1)の「地域全体の学科の適正な配置」については、2年間協議し、何か具体的な方向性が出たわけではありませんが、代表的な意見を3つあげましたので、読んで紹介します。

1つ目の意見は、「平成31～33年度頃には地域全体の1学年の学級数が28学級程度となり、平成25年度に比べて4学級程度減少することが共通認識されたと考える。地域の小中学生や保護者等への周知に必要な期間を考慮しながら、協議する必要がある」。

2つ目の意見は、先ほど参考資料1のイメージ図でご説明しましたが、『平成18年

9月の協議のまとめ』には、平成27～33年度頃に伊賀地域の県立高校が4校になるというイメージが示されているが、本当に4校になっていいのかをよく考えて、議論する必要がある」。

3つ目の意見は、「当地域としては普通科への志向が強いという意見があるが、地域のニーズを分析したうえで、普通科や総合学科等を今後どうしていけばよいか考えなければならぬ」。

以上、代表的な3つの意見をあげさせていただきました。

続いて2ページをご覧ください。(2)の「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援」については、本日の協議事項として予定しています。その協議のところで詳しく説明させていただくほうが、協議に移りやすいかと思しますので、後で説明させていただきたいと思します。

同じく2ページ、(3)の「伊賀地域における中高一貫教育の実施」については、そのメリット・デメリットや全国の事例等を踏まえて協議を行いました。そして、「当地域の人口規模や交通事情等も含めて総合的に検討したところ、中高一貫教育には、6年間を通じて『ゆとり』をもって学ぶことができる等の大きな利点があるという意見がある一方で、今後、少子化が進む中で、当地域の小中学校に与える影響の大きさが心配される等の課題があるという意見が多く出されたことから、伊賀地域に新たに中高一貫教育校を設置することは難しいと結論づけました」。

このように、3つの項目のうち、3つ目の「伊賀地域における中高一貫教育の実施」については、昨年度に、この地域に設置することは難しいという協議会としてのまとめを出していただきました。

(4)の「名張新高等学校（名張青峰高等学校）に係るワーキング会議の検討状況」については、昨年度も当協議会に報告しました。協議会でいただいた主な意見を3つ書いてありますが、次の報告事項で詳しく説明させていただきます。

最後に、「おわりに」という部分についてです。「本地域協議会では、これからも伊賀地域全体の県立高校のあり方について、引き続き協議を進めます。」としています。また、「協議にあたっては、多様な進路希望をもった地域の子どもたちが地域の学校で学べるような環境づくりに留意することが必要です。また、中学校卒業生数が平成31年以降に再び大きく減少することや、中学生の進路動向、学習ニーズ等を踏まえるとともに、小中学生及び保護者の進路選択への影響を勘案して、具体的な方向性が出せるよう検討を進める必要があります。」としています。

なお、『特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援』についても、地域全体の県立高校のあり方の中で、引き続き検討する必要があります。」というまとめになっており、本年度の協議へとつながっているということです。

後ほどの報告・協議事項の中で説明することにした部分もありますが、報告事項(1)の「これまでの協議の経緯等」についての説明は、以上です。

杉浦会長

事務局から、資料1の「平成25・26年度の協議のまとめ」について、「平成24年度までの経緯」と「平成25・26年度の協議の概要」等の項目に分けて、説明があり

ました。「地域全体の学科の適正な配置」や「伊賀地域における中高一貫教育の実施」等のテーマごとの説明に加えて、「おわりに」という部分で、今後の協議の方向性についても説明がありました。

この報告事項につきまして、委員の皆様から何かご質問あるいはご意見のある方がおみえになりましたら、ご発言いただきたいと思っております。いかがでしょうか。

新たに委員になっていただきました方も、いろいろなところで、今までの協議の経過をお聞きになる機会もあったとは思いますが、改めてご確認されたいことはございませんか。

特にないということでしたら、次の報告事項（２）につきまして、事務局から説明願います。

（２）名張青峰高等学校の開校に向けた検討及び準備の状況について

【資料２・別添レーフレット】

事務局（辻班長）

それでは、報告事項の２つ目の、「名張青峰高等学校の開校に向けた検討及び準備の状況」について、説明します。４ページの資料２をご覧ください。

先ほど説明しましたように、両校を統合して新しい学校をつくるのが平成２４年度にまとめられまして、平成２５年度以降は、その開校に向けた準備の協議をしてきました。具体的には、両校の教職員及び県教育委員会の事務局の担当で構成するワーキング会議を開催して、検討を進めてきました。また、ワーキング会議だけでは、個別具体的な検討が難しいので、分野ごとに専門部会を開催して、具体的な検討も進めています。分野ごとの専門部会については、７ページと８ページを参照してください。

７ページと８ページは、どのような専門部会を置いて、どのような内容を検討しているのかを一覧にしたものです。全部で２６の専門部会を置いています。１番から２６番までの順番通りに並んでないのは、検討する内容が関連する分野ごとに専門部会を分けて、場合によっては合同で協議をするなど、連携した検討を進めるためです。

表の右側には、主な検討事項が書いてあります。学校を新しくつくっていくには、非常にたくさんの細かなことを検討していく必要があります。それぞれの専門部会がそれぞれの検討事項について検討し、各専門部会でまとめた検討結果をワーキング会議で報告・検討しながら進めています。

ここで、資料２の４ページにお戻りください。２段落目になりますが、平成２７年度には、ワーキング会議と専門部会に加えて、校章・ロゴマーク、制服などのデザインや、修学旅行、卒業アルバム等について、地域の意見を反映しながら適正な選定を行っていくために、「名張青峰高等学校準備プロジェクト会議」を設置しました。この１５名からなるプロジェクト会議には、教職員だけではなく、地域の関係者の方にも入っていただいて、選定等の協議を進めています。後ほど報告しますが、校章、ロゴマークについても、このプロジェクト会議で協議してきました。

以降は、名張青峰高校について、これまで発表したことを項目ごとにまとめ記述しています。１番の「設置学科・コースと募集定員」については、来春の平成２８年度の募

集定員です。普通科が280人、1学級は40人ですので7学級の募集になります。また、特に国公立大学などへの進学を目指して取り組む「普通科・文理探究コース」を、1学級40人置いています。この2つの合計320人8学級が募集定員です。「普通科」については、「文理探究コース」に対して「未来創造コース」と呼ぶことをリーフレット等にも記載しています。

2番の「入学者選抜」、高校入試については、既に発表されています。来年2月に実施される前期選抜は、「普通科」と「普通科・文理探究コース」がそれぞれ定員の30%を募集枠として、調査書、数学と英語の学力検査によって選抜し、「普通科（未来創造コース）」では面接も実施します。3月に実施される後期選抜については、調査書、5教科の学力検査、面接によって選抜します。

3番の「教育課程と日課」については、「普通科」、「普通科・文理探究コース」ともに1週間の授業時間数は、50分×32時限です。詳しくは、別添の名張青峰高等学校リーフレットの7ページをご覧ください。7ページの一番下に書いてあります。週32時間ということは、週2回、7限授業があるということです。月曜、水曜、金曜が6限授業の日課で、火曜日と木曜日が7限授業の日課になります。「普通科」と「普通科・文理探究コース」が同じ日課で、毎日同じ時刻に授業が終わり、同じ時刻から部活動に励むということです。

リーフレットの2ページと3ページには、まだ確定ではありませんが、それぞれのカリキュラムを示しています。2ページの「文理探究コース」では、例えば、2年次に「解析入門」や「数学Ⅲ」等の学習内容を少し先取りしたような数学の科目があったり、3年次に「国語探究」や「数学探究」、「現代社会探究」という高いレベルにも対応した学校設定科目があります。

「文理探究コース」は、1年次のカリキュラムでは「普通科」と同じですが、「普通科」に比べて授業の進度が早かったり、教材の難度が違ってもきたりと、カリキュラムだけでは見えない部分もありますが、国公立大学等への進学に特化したコースとして設定されています。

資料2の4ページをご覧ください。4番の「部活動（予定）」については、リーフレットにも掲載されていますが、(1) 体育系12と(2) 文化系14の部活動の設置が予定されています。

5ページの5番の「特色ある教育内容」としては、まず(1)の「単位制」と「学習・進路指導」です。多様な選択科目で幅広い進路希望に対応する単位制と、生徒一人ひとりが勉学と部活動を両立しながら進路実現ができるような学習・進路指導を行うということです。

(2)の「情報利活用の能力の育成」については、1人1台のタブレットパソコンを3年間貸与し、授業やコミュニケーションツールとして活用していくことで、学習効果を高め、情報利活用能力を育てるということです。

(3)については、①から③の3つに分けて書いてあります。「英語コミュニケーション能力・グローバル社会で活躍する力の育成」についてです。①は、全ての生徒に対してG-T E Cという外部試験を導入して、それに基づいた英語コミュニケーション能力を育成していこうということです。②は、普通科の選択科目の中に、「グローバルコミュ

ニケーションA・B」という科目を開設して、英語によるディベートやスピーチ等の活動を行い、さらに英語コミュニケーション能力の育成を図るということです。③は、海外語学研修や海外の姉妹校・提携校との交流留学を実施して、グローバルな視点を育成するということです。

(4)の「キャリア教育」については、リーフレットにも記載されていますが、地域と連携した様々な教育活動を通じたキャリア教育を行うということです。

以上、特色ある教育内容として4点を挙げています。

6番の「校章・ロゴマーク」については、5月25日から7月10日まで公募して、校章に149件、ロゴマークに109件の応募があり、「名張青峰高等学校準備プロジェクト会議」を経て決定し、公表しました。校章は校旗等に、ロゴマークは体操服等に使います。校章は「青」の文字をベースにして、その三角形で名張青峰高校が育む3つの力を表しています。リーフレットに説明がありますが、名張青峰高校が育む3つの力とは、「未来を拓く力」、「グローバル化社会で活躍する力」、「人とつながる力」という3つです。その3つの力を三角形で表現したということです。ロゴマークについても、育む3つの力を3本のラインで表現して、山を越えて青い空に羽ばたく生徒の姿を表現しています。本日の資料は、白黒ですが、校章もロゴマークも、青色を基調としています。

続いて、6ページをご覧ください。7番の「制服」についてです。地域の中学生の意見を反映するために、現在中学3年生になっている名張市と伊賀市の生徒を対象に、昨年の平成26年12月から平成27年2月にアンケート調査を実施しています。そのアンケート結果と仕様書に基づいて、業者が制服をデザインをしました。5つの業者からデザインの提案があり、その制服モデルを、先日行いました高校生活入門講座（学校説明会）の会場で展示しました。5つの業者からそれぞれ提案のあった夏服・冬服、男女の20体の制服モデルを並べ、高校生活入門講座（学校説明会）の参加者にアンケートを実施しました。今後は、この制服に関するアンケート結果も参考にしながら、コンペ方式で選定を進めて、11月頃に制服を公表する予定です。

8番の「校歌」については、名張桔梗丘高校の校歌の楽曲を使い、歌詞を公募して、開校までの間に制定をしていくことが、現在決まっています。

続いて、9番の「高校生活入門講座（学校説明会）」についてです。この学校説明会は、先日、8月26日（水）に名張市のアドバンスコープADSホールで実施されました。たくさん参加希望者があったので、同じ内容で、午前の部と午後の部の2回に分けて開催しました。参加者数は777人で、募集定員の320人に対して中学生が468人来てくれました。その中学生たちが、名張青峰高校を受検してくれるよう、魅力ある教育活動を展開していくことが大切です。

学校説明会の内容については、学校からの説明のほかに、「吹奏楽部による歓迎演奏」や「放送部員による学校施設の紹介」など、生徒たちによる歓迎・紹介も行われました。今回の第1回学校説明会は、暑い時期でしたので、ホールで行いましたが、次回の第2回学校説明会は、名張西高校を会場に、11月7日の土曜日に開催する予定です。

最後に10番の「施設改修等の状況」についてです。名張青峰高校として使用する名張西高校の施設改修について、例えば外壁の塗り替えや西門の改修、照明器具の交換などを行っていますので、参考にご覧ください。

以上が、名張青峰高等学校の開校に向けた検討及び準備の状況についての説明です。

杉浦会長

平成25年度から、ワーキング会議や26の専門部会を立ち上げて、引き続き検討と準備を進めてきたということです。名張青峰高校の特色等についての説明とともに、今年度は、「名張青峰高等学校準備プロジェクト会議」も設置して、校章、ロゴマークも決定・公表されたということです。今後、制服や校歌も選定して、公表に向けて進めているという説明でしたが、この報告事項の(2)について、確認されたいこと、ご質問、ご意見がございましたら発言をお願いしたいと思います。

中谷委員

来春の開校に向けて残り時間が少ない中で、多岐にわたって検討していただいている、頭が下がる思いですが、残された名張桔梗丘高校の子どもたちへのケアについて、ワーキング会議のもとにいくつかの専門部会があって、その専門部会の中で検討しているという説明だったと思いますが、今日の資料には、それが出ていませんね。

今年の夏の高校野球の三重県大会で、名張桔梗丘高校の試合がテレビ中継されていました。その際に、アナウンサーが、「今年が最後になるかもしれません」とか、「名張桔梗丘高校として出場するのが最後になるかもしれません」とか、度々言われるわけで、聞いている方は非常に寂しい思いになってきました。

その中で、どうしても気になるのが、残された名張桔梗丘高校の子どもたちの進路であるとか、部活動、学校行事等についての保障・ケアです。その辺についてどのようにお考えいただいているのか、お聞きしたいと思います。

また、本年度はまだ3つの学年が在学していますが、来年度から1学年ずつ減る中で、学校でどのような感じで検討を進められているのをお聞きしたいと思います。今日は、名張桔梗丘高校のPTA会長の遊免委員も、名張桔梗丘高校の藤永委員も出席されていますので、教えていただけることがあればお願いしたいと思います。

杉浦会長

名張桔梗丘高校の生徒に対する卒業するまでの保障・ケアについて、検討状況はどのようになっているかについて、専門部会やワーキング会議等でも間違いなく検討していると思いますが、今回の資料には活字になっていないので、ご心配されるご発言がありました。この点について、事務局から補足説明願います。

事務局（辻班長）

先ほどの資料説明の中では、具体的には触れませんでしたでしたが、資料では8ページにある13番の「統合に伴う課題への対応」という専門部会で具体的な検討を進めています。

ご指摘いただきましたように、本年度は3学年そろっていますが、来年度は、2年生と3年生だけになり、教員の数も減っていきます。部活動ができるのか、合同チームを結成する場合、具体的にどうするのかということもあります。学校及び準備事務局からも、教員の配置について、県教育委員会に要望をいただいています。ただ、今の時期に

このようになりますというような回答はできませんが、教員配置について、できる範囲の中でしっかり対応していくように、担当課へ話をし、進めていきたいと考えています。

また、部活動で合同チームを結成しなければならない場合の生徒バス運行については、準備事務局からバス運行の見積もり等を含めた要望をいただいております。これについても予算措置されるように取り組んでいるところです。ただ、まだ決定に至っていることではありませんので、今日は活字にできなかったということで、ご容赦いただきたいと思います。

杉浦会長

よろしいでしょうか。

それでは、学校現場の声として、まず、名張桔梗丘高校の藤永委員から学校内での検討の様子についてコメントいただければと思います。

藤永委員

今春の入学生が本校として最後の入学生ということで、新しい名張青峰高校ができれば、来年度から名張青峰高校へ移るといような形と考えてみえる方がまだいらっしゃいますが、来年度は、今年度の1年生・2年生が新2年生・3年生として在学して、順次卒業していつて閉校を迎えることとなります。来年度からは下級生が入学してこないで、残された生徒たちが寂しい思いをしないように、名張桔梗丘高校ではいろいろなことを考えていこうとしています。

先ほど事務局から補足説明がありましたように、行うべきカリキュラムと教育内容をしっかりと保障するのが我々の願いであり、県教育委員会に対しては、いろいろな形で人的配置をお願いしたいと要望しているところです。ぜひ、その要望にお応えいただきたいと思います。学校行事や部活動につきましても、今年度が名張桔梗丘高校として3学年集う最後の行事であって、次年度は2学年と3学年、そして平成29年度は3学年だけとなって、どうしても寂しくなっていくと思いますが、いろいろな形を模索しながら、ぜひ元気が出るような学校行事や部活動にしていく工夫をしていきたいと考えています。

名張桔梗丘高校の生徒たちも、いろいろな面で寂しいでしょうが、例えば、毎朝、出会った人に元気に挨拶をするという名張桔梗丘高校の良さなど、そういったことを最後までやりきろうという思いで動いています。

部活動については、合同チームになることがあると思います。それぞれの部の部員数や活動の実態によって違うと思いますが、現在、話し合っているところです。特に、名張桔梗丘高校の場合は、最後まで名張桔梗丘高校の単独で活動するのか、合同チームを結成していくのかということと、生徒たちの思いを受け止めつつ、検討しています。学校の中では、それぞれの競技機関等からの、いろいろな情報をすり合わせながら検討していくことになると思います。

また、閉校に向けての様々な学校行事もありますので、皆様、あるいは同窓会などとともに検討しながら進めていこうということです。まだ、閉校に向けての具体的な動きはありませんが、「閉校」という言葉をできるだけ使いたくないので、「フェアウェル

委員会」といった名前のほうがいいのではないかという意見もあり、委員会等を立ち上げて具体的に動いていこうとしているところです。

杉浦会長

それでは、伊賀地区県立学校PTA協議会の会長ということでご出席いただいています。遊免委員に名張桔梗丘高校PTA会長のお立場から、現状についてご報告いただきたいと思います。

遊免委員

ほとんど、藤永委員からご報告いただいたとおりです。今年度の1年生は、閉校になるという前提のもとに入学していますので、ある程度の覚悟というか、そういう思いのもとで来ていただいていると思います。ただ、今の2年生や3年生としては、途中でそうになりましたので、どこまで心の整理ができているのか、なかなかそこまで踏み込んでいませんので、はっきりとは分かりませんが、受け入れていかなければならないという部分も持っています。

学習につきましては、最大の支援をいただくことを大前提に約束をいただいておりますので、その辺については県教育委員会にお願いをせざるを得ないと思っています。

あと、保護者が一番気にしているのは部活動のことです。今年、3年生が引退して、1年生と2年生のチームで今は駆け出しています。一応、部活動については、来年度は2年生を中心にやっていけるかというのはありますが、その先になりますと、やはり1校でやっていくのは非常に困難な事態が予想されます。それについてはワーキング会議の中で、いろいろと模索していただいているとは思いますが、きちんとした対応を望みたいと思っています。

名張桔梗丘高校の生徒には、いろいろな話もさせていただきましたが、皆さん明るく元気にやっていますし、そういうところは微塵にも感じません。ただ、3年生が卒業を迎えて2年生だけになったときに、やはりポツンと心の穴ができるのではないかと思いますので、それをなるべく軽減できるような対策を今から打っておこうと思っています。

それと、PTAにつきましては、名張西高校は名張西高校で、名張桔梗丘高校は名張桔梗高校で独立して最後まで全うしようということで、一応お話しはしていますが、内々にいろいろな打ち合わせはしていこうということを、会長からもお話いただいています。交流を深めていくことが、いろいろな形でつながっていくのではないかと思います。この形でお話をさせていただいて、学校への要望等があれば、学校のほうでまとめさせていただきたいと思っています。

杉浦会長

部活動を含めて、名張桔梗丘高校の学習環境をしっかりと保障していくのは大前提のことですので、プラスアルファで、卒業まで豊かで思い出深い高校生活が送れるようにぜひご配慮いただきたいと思っています。

この報告事項につきまして、ほかに確認されたいことはございませんか。

谷垣委員

5番の「特色ある教育内容」の項の(3)の③の中に、「海外語学研修や海外の姉妹校・提携校との交流留学の実施を通して、グローバルな視点を育成する」とありますが、これは計画なのか、それとも既に姉妹校や提携校が決まっているのですか。

また、地元の高校や中学校の内容がよくわかりませんが、英語の先生は、ネイティブスピーカーなのか、英語をマスターした日本人の先生なのか教えてもらえませんか。

杉浦会長

別添リーフレットのほうでも、海外語学研修や姉妹校・提携校との交流について記載されていますので、それを進めていくことは公になっているところですが、まず具体的に提携先がもう決まっているのかどうかというご質問です。また、ネイティブの先生が着任されるかどうかということについて決まっているかどうかというご質問です。この2点の質問について、事務局から回答願います。

事務局（辻班長）

委員の中には名張西高校の校長先生がいらっしゃいますので、不足する部分があれば、補足いただきたいと思います。

名張青峰高校の前身校の一方である名張西高校では、オーストラリアの高校と提携して短期留学を行っており、また、例年5月頃にタイから定期的に生徒の訪問を受けて交流も行っています。このような留学や交流活動を継続し、さらに発展的な取組としていきたいというものです。

また、教員については、基本的には英語の授業は日本人の教員が行いますが、「ALT」という外国語指導助手を何名か配置して、特にネイティブの立場から英語の指導にあたっています。

加藤委員

事務局から説明がありましたように、名張西高校には英語科があります。そこで取り組んできたことを更に充実していこうということです。オーストラリアの「リンディスファーン アングリカン グラマースクール」という学校と定期的に行き来していますし、タイのバンコクにある「サトリ・ウィッタ・ヤソン高校」からも定期的な訪問があります。

外国人のネイティブの外国語指導助手は、現在、名張西高校には2名配置されていますので、この取組を行うためにも、ぜひ2名配置を継続してほしいと、願っているところです。

谷垣委員

オーストラリアは英語圏ですが、タイはなかなか英語が通じない国です。そのようなタイとの交流があるわけですか。

加藤委員

この「サトリ・ウィッタ・ヤソン高校」は、表現がいいかどうか分かりませんが、かなりのエリート高校で、生徒は英語もとてもよくできます。また、来てくれるのは、日本語を勉強している生徒で、日本語力は、我々から見ると高1の英語ぐらいの力だと思います。語学だけではなく文化的な交流も含めて続けています。

杉浦会長

新校について、いろいろと検討していく中で、両校の特色や良いところをしっかりと継承していこうという議論からスタートしていますので、そのような点、ご理解いただければと思います。

野口委員

名張青峰高校への登校と下校についてです。伊賀市の子どもたちも名張青峰高校に通うことになります。今も、伊賀市から名張桔梗丘高校や名張西高校に通っていますから、大丈夫だとは思いますが、伊賀市からは名張桔梗丘高校より一駅遠くなって、バスに乗る時間も長くなるので、朝の電車等の乗り継ぎの時間帯は、大丈夫でしょうか。その点の確認と、7限まである曜日の下校時間帯のバスの本数や、名張駅から伊賀神戸駅へ向かう電車等の乗り継ぎの時間帯は大丈夫でしょうか。また、高校生なのでそこまで心配しなくてもいいかもしれませんが、伊賀神戸駅を出発して上野市駅へ着きますが、そこからバスで通う子もいると思いますので、その乗り継ぎ時間帯について、伊賀鉄道に要望してもらう等しているのかを聞かせていただきたいのが一つです。

また、名張というところは柔道が強いのですが、柔道部で活動することを望む子どもたちはどこへ進学するのですか。名張高校などに進学するのですか。

杉浦会長

2つご質問いただきましたが、まず、一つ目の登校と下校にかかる時間等については、新高校の設置場所に関する一昨年度の協議の中で、交通手段を含めて、名張桔梗丘高校と名張西高校までの細かな所用時間等の資料が提示されたと思います。その時の資料を、事務局は持ち合わせていませんか。

事務局（辻班長）

今、資料を持ち合わせているわけではありませんが、その時に検証した結果、伊賀市を出発して桔梗が丘駅で降りて名張桔梗丘高校に歩いていく時間が10数分で、さらに、名張駅まで行って、名張西高校までバスで7分程度だと思います。所要時間は、あまり大きくは変わらなかったと記憶しています。

また、別添リーフレットの一番裏側に、朝の登校時の基本的な時間帯が、駅とともに書いてあります。伊賀上野駅を7時34分に出発すると、名張駅に8時25分に到着します。名張青峰高校の始業時間は現在の名張西高校の始業時間と同じ8時50分からとじていますので、電車やバスの便はうまく接続していると思います。少なくとも在校生がいる間は、この時間帯でやっていきますので、通学時間については問題がないと

思います。

部活動をやった後の帰宅時の時間についても、2年ほど前に調べさせていただきました。非常に便利のいいときは1時間以内で上野市駅に着きますし、少々待ち時間があるときでも、1時間20分で上野市駅に着いたと記憶しています。

杉浦会長

登校、帰宅にかかる所要時間もしっかりと検討いただき、乗り継ぎについてもシミュレーションしていただいたことを、私も記憶しておりますので、ご安心いただいてよいと思います。

もう一つ、柔道についてのご質問がありました。加藤委員よろしいですか。

加藤委員

登下校については、上野市駅から伊賀線を利用して通っていただき、下校時も駅からすぐにつながっています。

武道系の部活動については、名張西高校と名張桔梗丘高校には剣道部があって、名張青峰校高校にも剣道部を設置する予定です。柔道部については、名張高校が大変強いので、そこに進学する子どももたくさんいると思っています。

杉浦委員長

それでは、この報告事項の(2)については、以上でよろしいでしょうか。

岡森委員

私の印象としては、名張桔梗丘高校も名張西高校も進学校というイメージがあります。資料2の5番の(4)に「キャリア教育」について記載されていますが、職業高校(専門高校)で職業や働くことの意義について学ぶというのはわかるのですが、名張青峰高校におけるキャリア教育というのは、具体的にどういうことをするのかをお聞きしたいと思います。

杉浦会長

私は、キャリア育成学科で勤務していますので、私からお話しさせていただきたいと思います。キャリア教育は、職業にダイレクトにつながるということだけではなく、短期的な視点、長期的な視点に立って、大学等に進学するときもどういう学部があるのかとか、その大学を選んだらどういう研究ができるのかとか、大学への進路選択をするときにも、教育現場で力を入れていただいています。ですので、進学校だからキャリア教育はしないということではなく、伊賀地域以外で進学校と言われているような高校でも、ほぼすべての高校で、キャリア教育に取り組まれています。

岡森委員

具体的にどのような内容でしょうか。

杉浦会長

例えば、卒業生で弁護士になった人、医師になった人、自営業の人といった様々な方を高校にお招きして、「ようこそ先輩」だとか「一日大学」だとかいった形で、職業に関わる学習を行っています。また、その職業に就くためには、今、こういうような勉強をしておいたほうがいいのか、こういう大学に行ったらいいといったものです。また、最近では、高校生も中学生、小学生も、生き方と働き方、ワークライフバランスとか、そういった点からも学んでいますので、印象は随分と違うのではないかと思います。就職の面だけからではなく、長期的な視点で取り組まれているとご理解いただきたいと思っています。

下猶委員

県教育委員会への要望を含めてです。実際に今の我が国はどうかというと、国の発表している資料などを見ると、例えば高齢者は25%、子どもが13%、何らかの障がいのある人は6%と、大体そのような数字がはじき出されていますが、現在25%の高齢者はもっと増えるし、何らかの障がいのある方も、今は6%ですが、実質的にはもっと増えていく可能性があり、逆に子どもたちの割合は減っていきます。

資料2の5番の3のところ、「グローバル社会で活躍する力の育成」ということを名張青峰高校の特色として取り上げられています。特色として大事ですが、ある意味ローカルという視点もあってしかるべきかと思います。地域に根ざすとか地域に帰るとか、このローカルな視点も特色の一つに加えられるようなカリキュラムだとか教育の仕組みをどこかに入れるほうが良いのではないかと思います。変な言い方ですが、英語を覚えて伊賀から出て行って帰ってこないというのではなくて、地域に帰ってきて地域に根ざして活躍してもらえようような人材を育成するという観点もあったほうが良いのではないかと考えているところです。

杉浦会長

名張青峰高校の特色やカリキュラムは既に決まっておりますので、今、すぐに意見を反映することは難しいと思いますが、学校でも常に改革を意識した議論をしていただいていますので、このようなご意見もあったということを伝え、反映していただければと思います。

事務局（辻班長）

下猶委員からご指摘いただいたように、名張青峰高校は、地域で活躍する人材の育成というローカルな視点も、元々のコンセプトとして大切にしています。グローバルな視野を身につけながら地域で活躍する人材の育成です。

別添リーフレットの4ページをご覧ください。円が3つ重なっている図があると思いますが、その真ん中のところに、「広い視野とコミュニケーションスキルを持ち、将来、地域社会や世界で活躍できる力を持った生徒を育てます」としており、「地域社会で活躍できる力を持った生徒を育てる」ことも、コンセプト1つとしています。

加藤委員

資料2の6ページの9「高校生活入門講座（学校説明会）」についてです。8月26日の学校説明会の参加者数が777人と、大変縁起が良い数字ですが、本当はもっと多くの参加者がありました。中学生2人3人が一緒に来て、そのうち1人だけが受付で名前を言っていたという、受付時の例が見受けられました。事前の申込では860人のお申し込みいただき、ほぼすべて来ていただいたと考えられますので、地域メディア「伊賀ユー」などでは参加者860人と書いている状況です。大変たくさんの方に関心を持っていただき、大変ありがたく思っています、この参加者の中でどれぐらいの生徒が実際に志望してくださるかだと思いますが、その期待に応えられるような学校づくりをしていかなければならないと思っています。

なお、「文理探究コース」と「普通科（未来創造コース）」という2つの募集枠の中で、「普通科（未来創造コース）」の7学級のほうは、今までの名張桔梗丘高校と、名張西高校の長所をできるだけ引き継いで、更に充実していくというところです。「文理探究コース」については、今までにも名張西高校から名古屋大学や三重大学へと進学していますが、そういった国公立大学等へ40人規模での進学を実現していこうということです。

津地域や大阪方面に流出している中学校卒業生が地元の名張青峰高校に進学して、学習と部活動を両立しながら、人間性も磨き、それぞれが進路実現をしていくことをコンセプトにしていますが、中学校の方々と話をさせていただく中で、まだまだ地域への浸透が不十分だと感じています。

我々はもちろん頑張らせていただきますが、当協議会でそのコンセプトをつくってきた高校ですので、ぜひとも市の教育行政、中学校の校長先生、現場の先生方、地域の方々に盛り上げていただけるよう、引き続きご協力いただければありがたいと思います。

中谷委員

学校説明会に参加した中学生について、地域別の特色はありましたか。もちろん、名張市の中学生が多かったと思いますが。

加藤委員

今回の参加者については、名張市の中学生と伊賀市の中学生が、ちょうど半々ずつでした。

中谷委員

白山中学校や青山を越えた地域からの参加もありましたか。

加藤委員

名張市に隣接する地域からの参加者も、もちろんありました。もともと中学生がたくさんいる地域ではありませんが、奈良県の山添村などの隣接地域の中学生もたくさん来てくれました。

現在、いただいたアンケートを分析しつつあるところですが、名張市の方は地元の高校という意識がより強いという印象です。伊賀市の方は、いろいろな選択肢の中でどち

らを選ぼうかと、まだまだ迷っているところがあるのではないかと感じています。

海野委員

備品などの移転計画についてお聞きしたいと思います。名張桔梗丘高校が閉校する時点で備品など不必要なものが出てくるかと思っています。そういった備品類などは、基本的には名張青峰高校に移転ということは承知していますが、例えば、公募制で伊賀地域の高校などに譲り受けたり、伊賀地域の中学校などからも、公募を受け付けていただけたりするのでしょうか。

事務局（辻班長）

資料2の8ページの26番の「移転計画」という部会のところをご覧になって、ご質問いただいたと思います。閉校や移転については、まだ先のことで、現在は3つの学年の生徒がそろっていますので、その在学生在がうちに、備品等を移転してしまったら大変なことになってしまいます。この専門部会での検討については、名張青峰高校が開校してからのことになるとと思います。その中で、名張青峰高校に引き継ぐべきところは引き継いでいかなくてははいけませんし、備品の中でも思い出の品をどこに納めるか等、今後の大きなテーマになってくると思います。その後、余ってくる備品等については、基本的には県立高校ですので、まずは他の県立高校で必要などころはないかという順番になってきます。

杉浦会長

委員の皆様非常に興味を持っていただき、質問も絶えないところですが、この件は報告事項であり、協議事項にできるだけ時間を割きたいと思いますので、以上で報告事項を終わらせていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

この後の協議事項に関連してご質問等がありましたら、そちらでご発言いただくようお願いしたいと思います。

それでは、事項書5番の協議事項（1）の「伊賀地域の高等学校を取り巻く状況について」、事務局より資料の説明を願います。

5 協議事項

（1）伊賀地域の高等学校を取り巻く状況について【資料3～9】

事務局（辻班長）

「伊賀地域の高等学校を取り巻く状況」として、今回の協議会では、最新の中学校卒業生数の予測や地域の中学校卒業生の進路状況等のデータをお知らせします。

まずは、9ページの資料3をご覧ください。伊賀地域の中学校卒業生数の推移です。当地域の中学校卒業生数について、左側にこれまでの過去4年間分を示し、網掛けの「平成28年3月 現中3」以降の右側に予測数を示しています。平成24年3月卒業から平成27年3月卒業までは、実際の卒業生数です。伊賀市、名張市を合わせて小計のところは伊賀地域全体で、平成24年3月卒業生数が1,643人、平成25年3月卒業

者数が1,607人、平成26年3月卒業者が1,627人で、現在の高校1年生にあたる平成27年3月卒業者は、1,496人でした。現在の中学校3年生は、平成28年3月卒業で、1,597人と予測されています。その下の欄に「101」とあるのは、前年度、現在の高校1年生の学年に比べて、101人多いということです。

さらに、平成29年3月卒業の現中学校2年生の学年は、1,515人という予測で、前年度に比べて82人少なくなると予測されています。その下の欄の「19」というのは、前年度に101人増えていますので、82人減っても平成27年3月卒業の現高1の学年よりは19人多いことを示しており、平成27年3月卒業者数との対比です。

同じように小計欄を右にたどりますと、平成30年3月は1,505人と10人の減少ですが、平成30年代に入ると急激な減少になります。平成31年3月は1,445人で、前の年に比べて60人減少し、平成32年3月も33人減少し、平成33年3月も29人減少します。現在の学年で表すと、小6、小5、小4の学年で減少していることが予測されます。その後、平成34年3月以降、学年で表す小3、小2、小1については、あまり大きな変化はないと予測されます。

また、この推移予測を伊賀市、名張市の別に見てみます。平成31年3月から33年3月までの、現小6・小5・小4の学年については、現小6の学年は名張市のほうの減少が大きいのですが、「H27.3対比」の欄の累積で見えていくと、伊賀市が「-86」、「-93」、「-114」と、大きく減少していきます。名張市のほうは、現中2、中1の学年で増加しますので、最終的には大きな変化がなく、今後の中学校卒業者数の減少の多くは、伊賀市での減少となると見込まれます。

なお、この表の中に「小中学校在籍者数」という欄があり、この数字を説明させていただきたいと思います。網かけの平成28年3月の列の一番下に1,590人という数字があります。この人数が、平成27年5月1日現在で中学校3年生として在籍していた人数です。

卒業者数の予測が、この在籍者数の1,590人より7人多い1,597人になること理由について説明します。例えば、5月1日現在で1,590人在籍していても、3月に卒業するまでの間に転校等によって在籍者も変化していきます。5月1日現在の在籍者数に、こうした変化を3年間平均した「変動率」を掛け合わせて算出しているのが、卒業者数の予測数値です。市別に見ていくと、名張市のほうは在籍者数699人に対して卒業予測者数が698人と、ほとんど変わりません。

伊賀市については、在籍者数の欄が「公立小中在籍者数」838人と「私立中在籍者数」53人と、2段になっています。日生学園中学校が今年度から「桜ヶ丘中学校」と名称を変えていますが、その私立中学校の在籍者数を2段目に分けて示しています。この桜ヶ丘中学校では、例年、学年途中での転入が多く、5月1日現在の中3は53人ですが、例年の傾向では60人近くに増えるというデータがあります。伊賀市の「公立小中在籍者数」838人と「私立中在籍者数」53人とを足した在籍者数は891人になりますが、卒業予測者数が、在籍者数よりも少し多い899人になるのは、こうした傾向を反映した変動率によるものです。こうした傾向は、中2、中1の部分では、更に大きくなります。中1の在籍者数は749人と24人とを合わせた773人ですが、特に桜ヶ丘中学校での増加が見込まれることから、この学年の中学校卒業者数は787人と

いう数字になっています。

当地域には、私立中学校はありますが、私立の小学校はありません。しかし、小学校の段階でも、在籍者数と中学校卒業予測者数が違っていています。例えば、現小6の列をご覧ください。小学校6年生の「小中在籍者数」は1,488人ですが、この学年が中学校を卒業する平成31年3月には1,445人になると予測しています。中学校卒業予測者数は在籍者数から40人ほど減っています。名張市の在籍者数713人に対する中学校卒業見込み者数が678人と35人減少し、伊賀市の在籍者数775人に対する中学校卒業見込み者数が767人と8人減少しています。この減少については、小学校から中学校に上がる時に、市外もしくは県外にある私立中学校へ一定数が進学する実態がありますので、その変動率を掛けて算出しているからです。現小学校1年生は、伊賀地域全体で1,426人在籍していますが、中学校を卒業する頃には1,387人になると予測され、ほぼ1学級分、40人ほど少ない予測数となっています。

参考として、伊賀地域県立高校の1学年の学級数を記載しています。来春の平成28年度は31学級で、中学校卒業予測者数の増加に対応して、前年度に比べて2学級増になっています。また、県全体の中学校卒業生数の推移と予測も記載しています。県全体では、平成33年3月に中学校を卒業する現小4の学年が最も少なくなっていますが、当地域では、平成35年3月に中学校を卒業する現小2の学年が最も少なくなっています。

先ほど、小学校を卒業するときに伊賀地域以外の中学校に進学する子どもたちがいるという話をしました。このことについて、10ページに資料4として、過去4年分のデータを用意しましたので、ご覧ください。例えば、伊賀市を見ていただくと、Aの行が小学校卒業生数で、Bの行が伊賀市内の公立中学校への進学者数と割合です。何ポイントも変わるような大きな変化ではありませんが、若干の変化があります。

伊賀市の公立小学校から伊賀市の公立中学校へ入学した割合について、平成24年度が96.7%、平成25年度が96.3%と、ほとんどが伊賀市内の公立中学校へ入学していますが、平成26年度は95.0%、平成27年度は96.1%と、少し減少しています。その分どこが増えているのかについては、Cの「県内私立中学校」へ進学している人数・割合が少し増えています。

名張市の公立小学校から名張市の公立中学校へ入学した割合については、平成24年度が95.3%、平成25年度が95.0%でしたが、平成26年度は93.6%、平成27年度は93.8%と減少しています。名張市でも、名張市の公立中学校へ入学する割合が、この2年間は少し低くなっています。その分、どこが増えているのかについては、Dの「県外中学校」へ進学する割合が少し増える傾向にあります。

伊賀市の小学校からCの「県内私立中学校」への進学の内訳については、中央の表「C 県内私立中学校の内訳」に示しました。平成26年度は19人、平成27年度は16人で、主に鈴鹿、高田、セントヨゼフ女子学園、桜ヶ丘（日生学園）中学校への進学が見られます。

名張市の小学校からDの「県外中学校」への進学の内訳については、一番下の表「D 県外中学校の内訳」に示しました。県外中学校の中でも公立中学校へ進学した生徒は、おそらく一家転住によるものが多いと思いますが、私立中学校へ進学した生徒は、大学

進学や部活動等の何らかの目的で進学していることが考えられます。大阪府や奈良県の私立中学校への進学が目立ちます。

続いて、11ページの資料5「伊賀地域公立中学校卒業生の進路状況（3ヵ年比較）」について説明します。伊賀地域全体の公立中学校卒業生の進路状況を、最近3ヵ年分まとめた表です。一番上が「伊賀地区県立高校」で、それぞれ右側に中学校卒業生数に対する割合が書いてあります。平成27年3月に、伊賀地域の公立中学校を卒業した生徒のうち74.5%が伊賀地域の県立高校へ進学しています。前年度より1ポイント増えましたが、平成25年3月卒業の76.4%よりは減っています。伊賀地域の県立高校へ進学した74.5%の残り分である、25.5%が、どのような進路をとっているかは、その下に区分して表しています。他地区の県立高校へ進学した生徒が9.3%で、主に津、津西高校と具体的な高校名を挙げていますが、ここ数年、津高校については50人近くの3%程度が進学しています。津西高校への進学は、この2年間で増加しており、40人弱の2.5%程度が進学しています。

「他地区県立高校」の「上記以外」の欄にも相当数が進学していますが、表の下の「※1」に、具体的な高校名をあげてあります。部活動で高い実績を上げている高校や、特別な学科がある高校が目立ちます。例えば、吹奏楽コース、食物調理科、自動車科等の特別な学科のある高校です。また、昂学園高校という全寮制の高校等、特色のある高校に進学している状況が見られます。

再度、表に戻って、上から3段目の「私立高校」への進学の内訳についてです。最近では、県内の私立高校に進学する割合が少し減っています。また、上から7段目の「県外定時制」として「山辺高校山添分校」があります。近年では、この山添村にある昼間定時制の高校に10人ほどが進学しています。

次に、上から8段目の「高等専門学校」への進学状況についてです。「近大高専」への進学者数は、ここ数年40人台でしたが、今春は51人の3.6%となっています。また、鈴鹿高専への進学も11人と、これまでで一番多い数字になっています。

この資料5の3ヵ年分を、伊賀市と名張市に分けて年度ごとにまとめたものが、11ページからの資料6の①から③です。一番新しい平成27年3月卒業生の進路状況を示した14ページの資料6の③をご覧ください。先ほど資料5で説明した状況を、伊賀市と名張市に分けて示しています。伊賀市の公立中学校卒業生が伊賀地域の県立高校に進学した割合は80.3%で、名張市の公立中学校卒業生が伊賀地域の県立高校に進学した割合は67.5%です。この差には、交通事情もあると思いますが、伊賀市と名張市とを合わせて、伊賀地域の公立中学校卒業生が伊賀地域の県立高校に進学した割合は、74.5%となります。やはり交通の便にも理由があると思いますが、津地区の県立高校へ進学する割合は、名張市のほうが圧倒的に多くなっていて、津高校への進学が36人、津西高校への進学が34人で、割合にすると5%台になっています。ただ、津地域以外の県立高校へ進学した割合については、伊賀市も3%台となっています。県内の私立高校への進学については、今春は、減少しています。

「県外全日制高校」への進学について見ると、県外の私立高校に伊賀市から17人、名張市から32人が進学しています。この県外私立高校への進学割合は、県内の他地域に比べると随分高い割合になっていて、主に奈良県や大阪府の私立高校へ進学していま

す。

最近、進学者数が少し多くなってきたのが、私立の通信制高校です。上から6段目に「私立定時制通信制（広域、県外を含む）」の欄があり、「上記以外※3」の行にあるように、名張市の公立中学校から11人が進学しています。表の下の「※3」に、具体的な校名を示していますが、「英心」という伊勢にある通信制高校への進学が少し多くなっています。また、県外定時制高校である「山辺高校山添分校」については、伊賀市からバスが出ていることもあるので、伊賀市からの進学が多くなっています。

「高等専門学校」については、鈴鹿高専への進学が増え、伊賀市から9人が進学しています。また、「近大高専」については、名張市からの進学者数が多いのですが、伊賀市からの進学者数も19人と、増加しています。

続いて、資料7の「伊賀地域県立高等学校第1学年の学級数の推移」についてです。随分古い平成17年度から書いてありますが、かつては上野商業、上野工業、上野農業高校がありました。平成28年度の学級数については、先ほど、2学級増になったとお話しました。上野高校の普通科が6学級から7学級に1学級増加し、理数科を入れて8学級となりました。名張高校は、平成10年度から1学年6学級の総合学科に変わり、ここ10年間ほどは1学年5学級でしたが、1学級増加し、6学級になりました。新しく開校する名張青峰高校は、1学年8学級です。「伊賀地区合計」の欄を見ていただくと、平成12年度当時の伊賀地域全体の1学年は、1学級40人で50学級ありました。平成28年度現在では、1学級40人で31学級に減少してきています。また、伊賀地域には上野高校と名張高校に普通科の定時制が1学級ずつあります。

続きまして、16ページの資料8「学科別募集定員の割合（三重県各地域の比較）」をご覧ください。専門学科には工業科や商業科等がありますが、大きく分類して普通科と総合学科と専門学科に分かれます。職業系の工業や商業は、すべて専門学科に分類して、地域ごとの割合を示しています。平成28年度の募集定員における伊賀地域の普通科は51.6%、総合学科は25.8%、専門学科は22.6%という割合です。伊賀地域は、他の地域と比べると総合学科の割合が高く、普通科の割合が低いのではないかとご指摘があります。

このようなご指摘に対して、以前にも、当協議会で説明しました。例えば、北勢地域、中勢地域、東紀州地域は、普通科の割合が非常に高くなっていますが、これらの地域の普通科高校のすべてが進学希望者の多い高校ということではなく、就職希望者が多い普通科高校もあります。対して、上野高校と来春開校する名張青峰高校という伊賀地域の普通科高校は、進学希望者が多い普通科高校であると言えます。また、現在、総合学科となっている「あけぼの学園高校」は、以前は伊賀高校という普通科高校でした。名張高校についても、以前は普通科と商業科の高校でした。あけぼの学園高校や名張高校は、多様な選択科目の中から進路や興味関心に応じて学べる総合学科に変えることによって、いろいろと学校の活性化を図ってきました。このように、伊賀地域では、就職希望者が多かった普通科高校を総合学科に改編して、改善と活性化を図ってきたという経緯があります。伊賀地域における総合学科については、このように捉えていただきたいと思います。

最後に、17ページの資料9「伊賀地域県立高等学校（全日制）の今後のクラス数見

込み等」について説明します。一番左側は平成27年度現在の状況で、伊賀地域の県立高校の1学年の学級数は全部で29クラスです。上野高校、あけぼの学園高校、伊賀白鳳高校、名張高校、名張桔梗丘高校、名張西高校の6校がありますが、来春は、名張桔梗丘高校と名張西高校を統合して名張青峰高校が開校しますので、1学年で見ると5校になり、1学年の学級数は全部で31クラスになります。

今後、平成30年度以降になると、伊賀地域の中学校卒業生数が減少してくことが予測されていますので、それに伴い、伊賀地域の県立高校の学級数も1学年28クラス程度になっていくであろうと予測されます。特に、平成31年度から平成33年度頃の1学年の学級数は、平成28年度の31クラスに比べると3クラス少ない28クラス程度になっていくのではないかと予測されます。来春に開校する名張青峰高校は、国公立大学への進学を目指すコースを設けて、現在、津地域へ進学しているような生徒も地域の県立高校で学べるようにしていくというコンセプトも持っていますので、伊賀地域の子どもたちが伊賀地域の県立高校で学ぶ状況となることが期待されます。このようなことも考えながらも、平成31年度から平成33年度頃には、当地域の県立高校の1学年が全部で28クラス程度となるのではないかとという予測です。その場合の「学科バランス」、「学校数・学校規模」などを含む検討が必要になるということで、平成25、26年度と協議しましたが、本年度以降も引き続き協議しなければならない内容であると考えています。

協議事項(1)についての資料説明は、以上です。

杉浦会長

伊賀地域の中学校卒業生数の予測や中学校卒業生の進路状況等について、地域特性も交えながら、詳細な説明がありました。当地域の中学校卒業生数や全体の学級数等には、あくまでも予測の部分もありますが、現状として当地域の中学校から津地域の県立高校や私立高校へ進学している子どもたちが、当地域の県立高校の中で多様なニーズを満たせるようにする必要があります。特に、大学等へ進学することを目的として他地域の高校へ進学している子どもたちに関しては、例えば、名張青峰高校の文理探究コースに進学してもらって、当地域の県立高校の中で子どもたちの力を育てていくための高校でもあります。予測は、過去のデータに基づいてシミュレーションされていますので、嬉しい誤算があることを期待しているわけです。例えば、名張青峰高校の文理探究コースによる効果等は勘案せずに、今までのデータから算出した数字になっているわけですね。そういうところも踏まえていただきながら、当地域の現状についてご理解いただきたいと思います。

それでは、事務局からの説明につきまして、確認されたいことやご意見がありましたら挙手を願います。

遊免委員

先ほどの説明で、名張のたくさん子どもたちが、津地域に進学せずに、この地元に進学してほしいという方向性で、名張青峰高校がつけられて、文理探究コースを設けていることが、よくわかりました。

ただ、名張西高校ができたときも、若干そういう方向性にあったのではないかと捉えていまして、実際にそれがなかなかうまく活用できなくて、現状として、地域外のほうに子どもたちが出ていくように思います。ですから、伊賀地域として考えていかないと、名張青峰高校も同じ様になってしまうと、少し心配しています。

そこにつきましては、中学校の担当の先生がどういった進路指導をされるかによって、大きく変わってくる場所もあるのではないかと思いますし、名張青峰高校をどういふふうにアピールし、伝えていくかによって、変わってくるのではないかと考えています。責任の重さも少し含めて、今後、高校側としては、中学生側にどういふふうにしていったらいいのかという質問も含めて、小中学校からお話いただければと思います。

杉浦会長

名張青峰高校のコンセプト等を考えていくときにも、当協議会の委員の皆様から、同じご指摘は受けています。名張西高校のときと同じ様になってしまうのではないかといいご意見もあったように記憶していますが、同様にならないように、県教育委員会の方も目指した姿になるようにしっかりと取り組んでいきますというコメントもいただけていました。

加えて、小中学校の現場では、名張青峰高校をどのように捉えているかお伺いしたいということでしたので、まず山田委員からお願いしてよろしいですか。

山田委員

伊賀市の中学生が、どういふ進路上の希望を持って名張方面の高校に進学するのかということについてのご質問でしょうか。

杉浦会長

名張青峰高校に限って、ご回答いただいたほうがよろしいですか。

遊免委員

名張青峰高校に限ってという部分もありますが、伊賀地域として、子どもたちに地域にとどまっていたらいい、伊賀地域から発信していく生徒を育てたいという思いがあると思います。名張青峰高校に限らず、そういった意味でお答えいただければと思います。

山田委員

本当だと、私もそういう視点でいなければいけないのですが、直近の中学校3年となると、とりあえず生徒個々がどういふ状況で自分の進路実現を実現できるかということに意識がいつています。また、伊賀市は伊賀市内の県立高校にぜひとも行かせたいという思いもあるので、その部分とこの伊賀地域全体でどのように子どもたちを伊賀管内の高校に行かせられるかと、私たちは両方矛盾するようなものを抱えながらいますので、まず、そこをわかっていただきたいと思います。

それから、名張青峰高校は普通科ということになりますが、名張西高校には専門学科の情報科がありました。名張西高校の情報科への進学については、数多くはないですが、

ぜひとも情報のことをやりたい、ぜひとも英語をしっかりやりたいという個別の具体的な進学状況もありました。普通科だけになってきたときに、伊賀市内の子には普通科があるのではないかと、なぜわざわざというようなこともあります。そうすると、それ以外の同じ普通科でもそれ以外の特色があるので、それを求めていくということは、もちろん進学になってもいいのですが、どの辺まで子どもたちが魅力を感じているかというのは、今のところ、難しいというところではあります。

和南委員

事務局から説明があったように、名張市から市外の学校に進学していく子どものニーズとしては、難関大学への進学を目指していきたいという子どもと、特定の部活動で非常に頑張っている学校を選んで、そちらのほうへ行きたいという二通りがあるのではないかと思います。

今回の名張青峰高校は、その両方に応えられるような学校を目指しています。こちらのリーフレットのほうにも、難関大学への進学についても書いてありますし、「部活動を頑張る人を応援する高校です」とも書いてあります。そして、「人とのつながり、地域とのつながりを大切にする高校です」というのがあって、コンセプトだと思います。私たち中学校としては、来春に開校する名張青峰高校がどのような学校かというのを、子どもたちや保護者にしっかりと伝えていくことが、まず役割だと思っています。

杉浦会長

開校の後、しばらく経って実績が出てくると、例えば、地域外に行かなくても難関大学に進学できるということで、自然に狙い通りになってくるだろうと思いますが、それまでの間に、高校生活入門講座等で地域に向けてコンセプトをしっかりとPRしていただくとか、そういった両面からの積み重ねが重要だと思っています。

では、日頃、生徒を指導されている庭田委員にお話をお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

庭田委員

私自身は、現在、名張中学校で3年生を担当しています。3年生の子どもたちには、1年生の時から既に名張西高校と名張桔梗丘高校が統合して新しい高校ができるという進路指導はしてきました。つまり、名張市に3校あったのが2校になる。「自分ら（あなたたち）もしっかりと勉強しなければいけない」、「中学校の生活をきちっとしなければいけない」というような指導はしてきました。

一般的なことですが、伊賀地域からが津地域へ進学するという子が非常に多くなっています。これは、近年というものではなくて、もう十何年も前から、進学したいなら津高校へ進学しよう、津西高校へ進学しようというような傾向があったと思われまます。

私が名張青峰高校の教職員代表の説明会にも行かせてもらったときに、高校の先生から聞いたのは、名張にはいい高校ができるのだなということです。名張桔梗丘高校と名張西高校が統合することによって、両者のいいところを合わせ持った、また、大学等への進学ニーズにも応えられるような高校ができる。言い換えれば、津地域へ進学しなく

ても名張地域で大学進学をかなえることができる。また、もう一つ言い換えれば、上野高校へ進学しなくても、そういった大学等への進学ニーズに応えられるような高校が名張にできると感じました。

現在、中学校3年生の生徒は、進路希望調査を出すような時期になっています。そして、子どもたちの声を聞いてみますと、名張青峰高校という新しい高校への期待感はとても高いと感じます。「名張青峰高校へ行きたい」という声はとても多いです。しかし、「名張青峰高校へ行きたいけど」というような声も聞きます。「名張青峰高校へ行きたいけれども、やはり人気が高いから入試が難しいのではないか」という声もよく聞きます。これが、今、私が名張中学校で生徒の声を聞いていて感じるところです。

伊賀市の先生には非常に申し訳ないのですが、なかなか上野高校へという声がほとんど聞かれないというのが、私の感じているところです。名張の子は名張青峰高校へという声が非常に多いというのが、今年、感じているところです。

東則尚副会長

副会長という役割があるのですが、発言させていただきます。

大変厳しいコメントをいただいたと思っています。私自身、この4月に上野高校に着任しまして、いろいろ調べましたが、先ほど、事務局から数値データが示され、実態がよくわかってきました。しかし、本校としても来年度はプラス1学級ということもありますし、名張市に新しい高校ができるということもありますので、本校だけのことを思いますと、本当に厳しい状況にあると考えています。実は、嵐の中にいるような感覚です。

本校がこのまま何もしないわけにはいかないということで、2学期が始まるのが少し早く、先月の25日に新学期を迎えましたが、職員会議で一つの改革プランを共有しようとしたところです。本校としても、いろいろとアクションを起こさせていただきたいと思っています。まだまだ、全校的にとまではいっていませんが、私自身も、少なくともこれまでの学校経営の仕方について、いくつか見直すところに気づいていることがあります。そういう協議をしたところです。大きな部分については、時期がくれば公表させていただけると思っていますが、どうなるかわからない部分がありますので、今ここでは発言を控えますが、お互いに切磋琢磨して、伊賀地域の県立高校全体として子どもたちや保護者の様々な教育ニーズに対応できるように頑張っていきたいと考えています。本校のことだけを申し上げるわけにはいきませんが、伊賀地域の県立高校全体として、そういった大きな意思を持っているということをご理解いただければと思います。

加藤委員

名張西高校について、例えば、遊免委員から最初から進学実績がどんどん伸びるという方向にはいかなかったのではないかとというようなご意見を、また、いつも上島委員からも厳しい反応をいただいているところです。名張西高校の学級数は、一番多いときですと、普通科8学級と英語科と情報科が1学級ずつの10学級ありましたが、特にその普通科の中にいろいろな生徒がいました。津地域には津、津西、津東、津商業、津工業等のたくさんの学校があつて、良い面も悪い面もいろいろとあり、いわゆる世間で言う

「輪切り」というようなものがあるように思いますが、伊賀地域は高校の数が少なく、状況がかなり違います。伊賀地域は非常に幅広い学力の生徒が一つの学校に来ていただいているというのが大きな特色です。昨年度から伊賀地域で実際に学校現場を見て非常に感じるのですが、伊賀地域は小中学校もそうだと思いますし、高校もそうだと思いますが、教員が一人ひとりの生徒に寄り添って非常に熱心に見る地域だと感じています。それは非常に良い面ではありますが、進学指導という面では、やや個別対応的であったと思っています。

名張青峰高校では、言葉が適切かどうかはわかりませんが、進学に特化した1学級として絞ろうということです。そうでないところは、単位制という仕組みの中で幅広い選択肢を用意しています。名張西高校の英語科には、非常に遠い地域からも来ていただいています。残念ながら最近では少し定員が割れることが多くなってきました。ただ、選択科目の中で少し柔軟性を持って、40人という枠にとらわれずに、15人でも25人でも選択科目を展開できればという新しいシステムをつくろうとしています。そのことをぜひご理解いただくよう、鋭意、広報させていただきます。

また、今日の資料を見て改めて危惧する点がありました。11ページの資料5です。伊賀地域の中学校を卒業して伊賀地域の県立高校に進学した割合が、今春は少し増えましたが、74.5%です。一方、9ページの資料3を見ると、当地域全体の平成28年3月の中学校卒業生数が今春に比べて101人増えるの見込まれるということです。単純に、101人増えるうちの74%から75%が伊賀地域の県立高校へ進学すると計算すると、75人程度の増加にとどまるということです。平成28年度は、伊賀地域の県立高校全体の募集定員が2学級、80人増となりますが、伊賀地域では今春も定員割れしている高校がありますので、75人程度の増加にとどまると、来年度はどこかの高校でさらに定員割れが増えてしまうのではないかとということです。

定員割れというのは、高校にとっては非常に大きなマイナス要素になる部分があります。ぜひともそういう意味からも、先ほど、難関大学等への進学を目指して津地域へ進学するという話もありましたが、昨年度までの実績の中で、上野高校からも名張西高校からも、名古屋大学や三重大学等、非常に幅広く同じようなところに進学しています。こういう言い方は良いかどうかはわかりませんが、合否のボーダーラインで高校をランクづけされる方があります。「あなたに合格の可能性がりますよ、ありませんよ」というところのボーダーラインで、学校を格付けされる方があります。そういう格付けのされ方をしますと、伊賀地域の高校は大変不利になります。非常に幅広い生徒を対象にして、一人ひとりに寄り添いながら進路実現や自己実現を図ってきているというところで、伊賀地域の我々は頑張っていますが、「ランクが低いじゃないか、高いじゃないか」というランキングの見方をされてしまうと、伊賀地域の高校は不利になります。

上野高校もそうですし、名張桔梗丘高校の単位制も、名張高校やあけぼの学園高校の総合学科も、それぞれが単位制や総合学科等の様々な仕組みを取り入れながら、幅広い生徒に対応してきているということ、地域の保護者の方々、中学校関係の方々にはご理解いただいていると思いますが、改めてご理解いただいて、ご尽力、ご協力をいただければ、大変ありがたいと思っています。

杉浦会長

加藤委員からは、来春、当地域の中学校卒業生数が101人増加することが見込まれるが、伊賀地域から伊賀地域の県立高校に進学した率をそのまま掛けると、来春はさらに定員割れを起こしてしまう高校があるのではないかと、危惧するご指摘がありました。その点については、逆に、新しく開校する名張青峰高校の存在も含めて、定員が増えた分以上に地元に進学したいという中学校卒業生を増やし、伊賀地域の子どもが伊賀地域に進学してくれる率を、例えば、80%以上にしていくことが、初年度の目標にもつながるのではないかと思います。

事務局からの補足説明等がありますか。

事務局（辻班長）

加藤委員から、増加見込みの101人に75%を掛けると75人程度にしかないというご指摘がありました。細部については述べませんが、募集定員を策定する際には、いろいろな計算をしています。この101人の中には、私立の桜ヶ丘中学校も入っていますが、桜ヶ丘中学校を除いた伊賀市と名張市と公立の中学校について、細かに進路状況等を分析したうえで、募集定員を策定しています。例えば、伊賀市の南にある青山中学校の卒業生は名張市内へ進学する割合が高いなど、中学校によって進路状況が違ってしますので、そのような要素等を全て計算に入れると、来春は、伊賀地域の県立高校への進学者数が84人程度増えると見込んでいます。こうした詳細な計算等に基づいた検討のうえで、2学級増が適当と判断しています。

上島委員

古い話ですが、私も長年、中学校の進路指導もしてきましたし、こういう立場の中で高校の思いと中学校の思いとそれぞれがあります。高校は定員割れを起こさないようにということはよくわかります。中学校は浪人を出さないようにどこかの高校に入らなければならないということがあるわけで、それぞれの立場でいろいろな思いがあって、どうやってうまく調整を図っていくかというのが、非常に難しいところであると思います。

様々な状況がありながら、こうやって何年かかけて地元高校と和解をしてつくっていくことになったわけで、今日の説明にもありましたが、一つは、こういうコンセプトの中で考えていこうということですから、そういう意味の中で考えたら、やはり私どもとしては、新しくできた名張青峰高校がきちんとうまく育っていくようになってほしいと思いますし、伊賀地域の高校がそれなりの力を発揮してほしいと思います。

また、地域の中で切磋琢磨することは非常に大事なことではないかと思うところです。ある部分では、この伊賀地域の中では、本当に大学進学、特に難関大学への進学を出すには、名張の子も上野高校を目指していたのではないかと思います。しかし、特に近鉄沿線の電車の利便性ということで、名張地域から津方面等に出て行く数はずいぶん増えていきました。そうこうしているうちに、これは失礼なことかも知れませんが、以前の上野高校の進学イメージが段々下がってきた部分もあるのではないかという気もしないわけでもありません。

そのような中で、名張桔梗丘高校ができ、名張西高校ができる中で、当初のコンセプト

トはもっと崇高なものがあつたわけですが、なかなかその実績が伴っていかなかったこともあります。また一方では、伊賀鉄道の通勤や通学の費用が高い。こうしたいろいろな要素がある中でうまくいかない。それは何かというと、これを見てみればわかりますが、これだけいろいろなところへ出ていく学校がたくさんあるわけです。地元でそれだけのニーズに応えられる学校があれば、この地域を出ていく数は少なかったと思います。そのニーズに合った学校がないために外へ出ていかざるを得ない。「もともと名張の子は遠いところへ行くことを好むのではないか」ということは、あまり当てはまらないのではないかと思います。やはり、適当な行くところがないから遠くへ行かざるを得ないということもあつたのではないかという気もするわけです。それはそれとして、今さら言っても始まらないことですから、この際は、名張青峰高校が、この最初のコンセプトのとおり、きちんと難関大学を目指す普通科の進学校として、文理探究コースをつくってもらいながらも、なるべく地元の子は地元の学校へ行けるようなことが大変大事なことではないかと思つています。私どもも、少子化が進む中で、それぞれの子どもに合った進路指導の実態を踏まえた教育をしていけたらと思つていますが、外へ行くばかりでは困るので、やはり名張としましても、ふるさと学習をこれから充実させていこうと思つているところです。小中学校だけではなくて、やはり高校もできる限り、将来も地元で活躍してもらふ人材を育てていかなければならないということで、小中学校と高校を所管する教育委員会は、それぞれ市と県で違いますが、力を合わせていかなければならないことがあるのではないかと思つています。そうしないと、本当に消滅する市になってしまう恐れも出てくるわけですから。そういうことを考えたときに、長い目で考えていかなければならない。しかし、保護者、子どもにとっては、目先のことは非常に大事なことから、しばらくこうやって本気で行政も学校現場もきちんと考えることが大事だと思つているところです。

次に、1点だけ心配しているところがあります。この名張青峰高校の文理探究コースと上野高校の理数科がバッティングしないのかということ。これは、伊賀市と名張市でうまく調整を図ることができれば、それはそれで収まることではないかと思つていますが、同じ伊賀管内の中で切磋琢磨してもらつて、よりよい方向としていただくように、当協議会でも時間をかけて検討したところですから、それが生きてくる方向へみんなが持つていかなければなりません。特に名張青峰高校には大変期待も多いわけですが、逆に、今後3年間の実績というのは非常に大事だと思つています。やはり、きちんとした実績が残せるように、送り出す側も、また、受け入れる側もともに力を合わせてやってほしいと思ふし、それを大きく支えてもらうのが県教育委員会だと思つていますので、進路指導に長けた教員を送つていただくこともないと、掛け声だけ、形だけつづつたのでは、前の学校の二の舞になってしまう恐れがありますので、みんなが本気で頑張つてもらいたいと思つているところです。

杉浦会長

定員割れについて、県立高校、私立中学校・高校の受け入れる側からすると、本当に冷や冷やするところがあるということは、逆を言えば、伊賀地域の子どもたちはいろいろな進路の選択肢がたくさん持つていうらやましいとも思ふます。ただ、定員割れをす

るということは、入学しやすいと言えればそれまでですが、教育の質を保つ点でもいろいろと難しいところが出てくると思いますので、それぞれの高校がしっかりと定員を満たすような地域にしていっていただきたいと思います。

本日の協議事項として、まず（１）の「伊賀地域の高等学校を取り巻く状況」について、細かな数値データを見ていただきましたが、必ずしも、今、議論の中心になっています難関大学等への進学を目指す子どもたちだけのデータではありません。この事項を一番はじめに設定したのは、本日の協議事項の３つ目にありますが、近年、数字から見ますと非常に増えております特別な支援を必要とする子どもたちについて、どのように考えていくのかと、切り離して考えられないことだからです。伊賀地域としてどのようにしていかなければならないのかということの前提として、皆様にこの数字をご理解いただきたいという思いもありまして、協議事項の１つ目に設定しています。

まだまだこの１番目の議題についてご発言されたい委員もみえるかもしれませんが、会議の時間が残り２５分となりましたので、２つ目の協議事項に移らせていただきます。

それでは、本年度の協議の進め方について、事務局から提案願います。

（２）本年度の協議の進め方について【資料１０】

（３）特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援について【資料１１・１２、参考資料２・３】

事務局（辻班長）

今回の会議時間は２時間３０分と設定していましたが、資料の説明もたくさんありましたし、ご意見もたくさんいただきました。残り２５分になってしまいましたので、残る協議事項２つについて、まとめて説明させていただき、残った時間でご協議いただきたいと思います。ただ、今年度から新しく委員をお務めいただく委員もいらっしゃいますので、説明が少し丁寧になります。協議時間がどれだけ残るかわかりませんが、ご意見をいただけたらと思います。

まず、協議事項（２）の「本年度の協議の進め方について」、１８ページの資料１０「平成２７年度の協議の進め方について（案）」をご覧ください。冒頭で、昨年度までの協議の経緯を説明し、今年度も引き続きの協議になることを簡単に申し上げましたが、今年度についても、１番目の「地域全体の学科の適正な配置」という観点からの協議が必要になると考えます。今後も、地域の子どもの数が減っていく中で、「大学等の高等教育機関への進学ニーズに対応する学校」、「職業に関する専門的な知識と技術を習得できる学校」、それから、総合学科の「多様な選択科目から進路希望や適性に応じて学びたい科目を主体的に選択して学べる学校」も、地域になくってはならないと考えられますので、今後もそれらが地域に適正に配置される学校づくりが必要であり、この観点から中長期的な視野をもって検討を進めることが必要だと考えます。

また、先ほどもデータを見ていただきましたが、中学校卒業生数が平成３１年度以降に再び大きく減少する見込みの中で、中学生の進路動向や学習ニーズ等を踏まえながら、小中学生や保護者の進路選択への影響という時間的なことも勘案して、何らかの方向性が出せるように検討していく必要があると考えます。

2番目の「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援」という観点については、1番目の観点と関連するものだと思いますので、1番目の観点と合わせて、引き続きご協議いただこうと考えます。

この2番目の観点については、昨年度までの協議の中でいろいろなご意見をいただいていますので、今年度は、特別支援教育にかかる他県の先進事例を視察調査し、当協議会における協議の参考としていきたいと考えます。

続く「2」の「協議及び視察調査の予定」では、今年度の具体的な予定を提案しています。(1)の「第1回協議会(9月1日)」である本日の協議会では、ここまでの協議題と、残った時間で3つ目の協議題についてのご意見と、今、提案させていただいている「本年度の協議の進め方(案)」についてのご意見をいただきたいと思います。

(2)の「先進校等への視察調査」については、9月から10月にかけて他県への視察を入れていきたいということです。(3)の「第2回協議会(11月)」では、その視察調査の結果を参考にして、「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援」の観点で協議を深めていただくとともに、「地域全体の学科の適正な配置」の視点からも協議を深めていただきたいと思います。そして、(4)の「第3回協議会(2月)」では、「伊賀地域の高等学校の今後のあり方」について、総合的にご協議いただきたいと思います。

なお、昨年度の協議では、「伊賀地域における中高一貫教育」について一定の結論を出していただきましたが、本年度は、「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援」の視点について、先進校への視察調査の結果も参考にして協議を行い、何らかの着地点を見出したいと考えています。

最後に「3 その他」についてです。名張青峰高校の開校に向けた検討及び準備状況については、次回以降も適宜報告していきたいと思えます。

以上が、協議事項(2)の「本年度の協議の進め方」についての説明です。

続きまして、ここからは、協議事項(3)の「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援」の観点についての説明に移ります。

19ページの資料11をご覧ください。まず、当地域協議会では、「特別な支援を必要とする子どもたちを含め、当地域のすべての子どもたちが、当地域で学べる学校づくりが必要であるとの意見があることから」、この観点から協議を続けてきています。先ほども資料5と資料6をご覧くださいましたが、例えば、この地域から奈良県の山辺高校山添分校という昼間定時制の学校に進学している生徒がいるのではないかとということです。また、伊勢にある英心高校という通信制高校など、ずいぶん遠いところへ進学している生徒がいるということです。そこで、高校へ進学したい当地域のすべての子どもたちが、当地域で学べるような仕組みづくりが必要ではないかとということです。そのことを議論していく必要があるのではないかとということです。平成24年度の協議において、新高校の学校像等についてまとめたときにも、そのような意見が出ていました。そこで、平成25年度以降は、そのことについて協議していこうということで、現在に至っています。

「特別な支援を必要とする子ども」ということについて、よくご存じの方もおられる

と思いますが、ピンと来ない方もみえると思います。ここで、26ページの参考資料2をご覧ください。まず、「2 特別支援教育の現状」として、その枠組みについて説明します。右側に長細い四角で囲んだ「特別支援学校」があります。伊賀地域にある特別支援学校は、伊賀つばさ学園です。ここでは、「障がいの程度が比較的重い子どもを対象として、専門性の高い教育を行い」、その年齢段階で小学部、中学部、高等部に分かれています。対象としては、「肢体不自由、視覚障がい、聴覚障がい、病弱・身体虚弱、知的障がい」の子どもたちが対象になります。

左側の四角い枠には、「幼稚園・小学校・中学校、高等学校・中等教育学校」が入っています。三重県には中等教育学校はありませんが、一般的な図ですので、中等教育学校も入っています。小学校、中学校、高校に分かれています。その四角い枠の右側の部分に「特別支援学級」があります。この「特別支援学級」は、小学校・中学校にあって、「障がいの種別ごとに、障がいのある子ども一人ひとりに応じた教育を行う」もので、対象としては「肢体不自由、弱視、難聴等」として、「特別支援学校」とは対象も少し違います。「通常の学級」とは別の「特別支援学級」で、障がいの種別ごとに一人ひとりに応じた教育を行っていて、学年ごとに学級に名前がついている場合もあります。また、「通常の学級」の中にも、特別な支援が必要な子どもが在籍していますので、その場合は、「支援員」がつく場合があります。「支援員」については、※印に説明があります。「通級による指導」は、「通常の学級」に在籍しながら、ほとんどの授業を通常の学級で受けますが、障がいの状況に応じた特別な指導を受けます。例えば、言語障がいの子どもの場合は、その障がいに適した週何時間かの指導を、特別な指導の場で受けます。これらの対象としては、肢体不自由等に加え、「学習障がい、注意欠陥多動性障がい、自閉症」となっています。また、「通常の学級」と「特別支援学級」は同じ学校の中にあるので、活動によっては子どもたちが一緒に活動します。

ここにいる子どもたちが高等学校への進学を希望した場合に、ぜひとも地域の県立高校で学べるような仕組みづくりができないかということが協議のスタートでした。

「特別支援学級」等に在籍する子どもたちがどれぐらいいるのかということ、その次の27ページの別表「特別支援教育に係る三重県の公立学校の在籍状況等」にまとめました。平成26年度までの3年間の在籍者数をまとめています。「特別支援学校（県立）」の在籍者数は、県全体としても、伊賀つばさ学園についても、増えています。「特別支援学級」の在籍者数も増えています。「通級による指導」を受けている子どもたちの数も、県全体で、そして伊賀地域でも増えています。

こういう子どもたちが地域の学校で学べるようにということから、このことについて協議が始まりましたが、昨年度までにいただいたご意見を、少し振り返らせていただきたいと思います。2ページの資料1をご覧ください。協議につながる部分ですので、どのようなご意見をいただいていたかを、読み上げながら説明します。

1つ目と2つ目のご意見です。

- 特別な支援を必要とする子どもは増加傾向にあり、地元の県立高校に受け入れる枠組みをつくってもらいたい。
- 保護者の中には、子どもに高校卒業資格を取らせたいという声があり、子どもたちが私立通信制高校や県外に進学している実態を踏まえると、当地域の県立高

校に受け入れ体制をつくる必要があるのではないか。

3つ目からと5つ目までのご意見です。

- 少子化の一方で、特別な支援を必要とする子どもたちの増加に伴い、小中学校の「特別支援学級」の数も増加している。そこで学ぶ子どもたちのほとんどが、高校への進学を希望しており、その希望を実現するために国の動向も注視しつつ、県での制度のあり方を考えていく必要がある。
- どの高校においても特別支援教育に関する校内委員会を設置するとともに、特別支援教育コーディネーターを中心に態勢の整備を図り、中学校と情報交換を十分に行いながら、入学してきた生徒に対する最大限の支援をしていると考える。
- 義務教育である小中学校には特別支援学級に関する人的配置の法的措置があるが、高校にはない。加えて高校では入学者選抜、入試です。それから、履修単位認定、通学手段、施設や設備、卒業後の出口保障等に課題がある。

6つ目のご意見です。

- 県立高校の入学者選抜に特別な選抜枠を設けた場合は、その分、他の志願者の定員枠が少なくなることや、他の志願者との間の公平性の確保に課題がある。また、地域全体の学科の適正な配置の議論にも影響してくる。

7つ目と8つ目は、今後の協議の方向性についてのご意見です。

- 高校に入学者選抜特別枠を設けるよりも、多様な教科・科目の選択ができるように教育課程を柔軟にすることにより、事実上、高校入学の門戸が広がるという方向性がふさわしいのではないかと。
- 中学校は、特に「自閉症」「情緒障がい」の子どもたちが県立高校に多く受け入れてほしいと考えているのではないかと。次年度の協議を具体的に進めるために、地域全体の県立高校のあり方の中で、3部制の定時制高校を設置することも検討してはどうか。また、その場合は、上野高校定時制と名張高校定時制のあり方を議論する必要がある。

このようなご意見をいただいていることを踏まえて、今年度はどういう切り口から議論していったらよいかと事務局で考えました。

例えば、「受け入れる枠組みをつくってもらいたい」、「受け入れ体制をつくる必要がある」、「制度のあり方を考えていく必要がある」というご意見をいただいています。ただ、この部分については、例えば、入学者選抜に特別な枠をつくるとすれば、三重県全体の入学者選抜制度の改革となります。事務局として、当然、いただいたご意見について検討していく必要があると思いますが、この伊賀地域に限定した入学者選抜制度の改革として、当協議会でこれ以上の協議を進めることは難しいのではないかと考えます。

また、「3部制の定時制高校の設置することも検討してはどうか」というご意見もいただきました。三重県にある3部制の定時制高校は、四日市市にある「北星高校」、津市にある「みえ夢学園」などです。伊賀地域から一番近いのが「みえ夢学園」で、昼間部が2学級、夜間部が1学級の3部制定時制高校です。先ほどのご意見の中にもありましたが、伊賀地域に3部制の昼間定時制高校を設置するとすると、現在の上野高校定時制と名張高校定時制の統合等につながる問題にもなると思われます。また、例えば、昼間部を2学級つくとすれば、おそらく、現在この地域の全日制高校に進学している生

徒の2学級分が、この昼間部に進学することになると考えられます。そうなりますと、平成31年度から平成33年度頃には、伊賀地域の1学年の学級数が全部で28学級程度になると予測されている中で、その28学級程度のうちの2学級分が昼間定時制へ進学することになりますので、伊賀地域の全日制の定員がさらに2学級分減少するのではないか、全日制進学率が減少するのではないかと考えられます。このようなことから、昼間定時制高校の設置を検討するにあたっては、地域全体の県立高校のあり方として協議していただかなくてはならないと考えられます。

そこで、まずはどの切り口でご協議いただくのが適切と考えました。19ページをご覧ください。「2 今後の協議の方向性について」です。先ほど、ご紹介しました下から2つ目のご意見を踏まえて、まずは、「高等学校において、多様な教科・科目が選択できるように教育課程を柔軟にするなど、広く生徒を受け入れる方法等について」という観点で、今年度の協議を進めていただければどうかと考えます。例えば、高校には入学者選抜があり、その高校の教育課程（教科・科目）を履修することが難しいと見込まれる場合には、合格が難しくなります。そこで、高校において多様な教科・科目が選択できるように教育課程を柔軟にすることを通して、広く生徒を受け入れるような学校づくりができれば、実質的には入学の門戸が広がっていくのではないかと考えられます。

また、このことについて協議を進めるために、具体的な事例を参考にしながら協議する必要がありますと考えました。次に、20ページの資料12「特別支援教育にかかる先進校への視察調査（案）」をご覧ください。「発達障がい等を含む特別な支援を必要とする子どもたちに対して、多様な教科・選択科目の選択ができるなど、教育課程の充実・柔軟化を図り、授業方法及び授業形態の工夫等によって、支援している全日制の高等学校」を視察調査先として、他県の先進校の事例も参考にしながら、次回以降の協議を進めていただければと考えました。

なお、「発達障がい等を含む」の「発達障がい」という言葉は聞き慣れない方もおられると思いますので、具体的には参考資料2の29ページをご覧ください。「発達障がい」とは、「学習障がい」、「注意欠陥多動性障がい」、「高機能自閉症」というような障がいの総称です。

具体的には、この9月から10月の間に、関西方面への日帰りでの視察を考えています。これまで、事務局職員だけが視察に行くことが多かったのですが、今回は、当協議会の委員の皆様の中からも何人かご参加いただき、その視察調査の報告を参考にして、第2回協議会でご協議いただきたいと考えています。委員の皆様の中からも何人にご参加いただくのかわかりませんが、先進事例を実際にご覧いただき、感じていただければ、今後の協議に活かしていきたいと考えています。

以上で説明を終わりますが、今年度は、まずこういう方向で、特別支援教育の部分についてご協議いただければいいという提案も含めて、説明させていただきます。

杉浦会長

それでは、まず協議事項の2つ目「本年度の協議の進め方について」、18ページの資料10をご覧ください。本日は第1回の協議会ですが、平成27年度の協議会として

は年3回なので、残り2回開催するという事務局案になっています。また、「特別支援教育にかかる先進校への視察調査」を挟み、第2回と第3回で「地域全体の学科の適正な配置」を含めて、「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援」の観点で協議を進めていきたいということですが、この方向でよろしいでしょうか。

(委員からの異議なし)

ありがとうございます。

次回以降、この2つの大きな切り口で協議していただきます。

先ほど、協議事項の1つ目の「伊賀地域全体の高等学校を取り巻く状況」については、時間を取りまして皆様にご理解いただきました。協議事項の2つ目の「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援」については、事務局から資料説明もありましたが、次回の協議会までに、26ページからの参考資料2をじっくりとお読みいただきたいと思います。

特別支援教育について、現状の枠組みを見ますと、県立高校の場合は義務教育ではありませんので、左側の大きな枠の中に、「幼稚園・小学校・中学校・高等学校・中等教育学校」とありますが、「特別支援学級」や「通級による指導」は、高等学校には設置されていません。「高等部」が特別支援学校にあり、伊賀地域には伊賀つばき学園があります。国の動向にもよりますが、まず、こうした枠組みとしての現状があるということをご理解いただきたいと思います。

また、昨年度までの協議の中でも、特別な支援を必要とする子どもは、伊賀に限ったことではなく、全国的に増加傾向にあるということでした。このような中で、特別な支援を必要とする子どもたちに関しても、地元の県立高校に受け入れる枠組みをつくってもらいたいというような声はずっと出てきていましたので、検討してきましたが、県立高校の入学者選抜で特別な枠を設けると、地域の中学校卒業生数が非常に減少していく中で、地域の高校の学級数にも非常に大きく影響してくることもなります。また、県立高校の入学者選抜制度については、伊賀地域だけではなく、県全域で大幅な改革がなされないと、実行が難しいというようなこともあります。

地域の声にできるだけ早く応えられるように検討を進めていくために、昨年度、委員の中からご提案がありましたように、高校の教育課程を柔軟にすることによって、単位の履修や取得がしやすくなる過程の中で、卒業も入学もしやすくなって、高校への門戸が広がっていくという方向です。

こうしたことを踏まえて、本年度、「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援」の観点で検討していこうというのが、19ページの資料11です。協議の方向性として、「高等学校において、多様な教科・科目が選択できるように教育課程を柔軟にするなど、広く生徒を受け入れる方法等について」、本年度の協議を進めていったらどうかという事務局の提案となっています。

本年度は、このような切り口で協議を進めていくという提案について、異論のある方はいらっしゃいますでしょうか。もちろん、今後、協議を進める中で、ご意見をいただいている方向が変わってくることもありえますが、第2回以降の協議会の協議事項を設定するためにも、委員の皆様、このような方向でよろしいでしょうか。

和南委員

本日の協議会に来させてもらうために、昨年度の協議内容を、今日の資料に載っているものと、県のホームページに載っている最終のものを読んできました。19ページの資料11の中で、この方向性でという形ですが、最終の協議会の報告の中に、先ほども説明がありましたが、昼間定時制に触れてあります。昼間定時制の高校が県内に3校あるが、いずれも特別な支援を必要とする子どもたちを受け入れるための高校というわけではないとありました。学校ごとに教育課程があって、その目指すところも異なるが、じっくりと学べるように教育課程を柔軟に設定している高校なので、結果的に特別な支援を必要とする子どもも多く入学しているのが実態であるとありました。

19ページの「高等学校において」という部分ですが、これは全日制の高等学校の部分なのか、昼間定時制も含めて検討していくということでしょうか。

杉浦会長

事務局からの説明の中にも、具体的な高校名等も出てきていましたが、その辺も含めて検討をしていくということによろしいですね。

事務局（辻班長）

現状としては、「全日制の高等学校において」と考えています。先進校視察も全日制の高等学校を視察調査先としています。また、昼間定時制をつくることについては、別の議論になってくると思います。

古川委員

今日、初めてこの協議会に参加させていただきまして、私どもの立場で言うわけではないですが、いろいろな進学の話であったり、特別支援であったりと、いろいろな形で話をさせていただいているのも十分理解させていただきます。

就職をする生徒たちも当然どちらにもいるので、伊賀地域唯一の専門高校として、例えば、他の地域の専門高校の情報も得ながら、今後、そういった中でこれからこういった形の勉強をしていけば、今後、就職に役立つ学校ができるのだろうかということも、一つの検討課題としてあげていただければ幸いです。2回目以降、もしくは3回目になるかわかりませんが、そういった資料も提示いただければありがたいと考えています。

杉浦会長

本年度の協議の進め方についてのご要望ですので、事務局とも相談したいと思います。

下猶委員

30ページの参考資料3についてです。ここに「インクルーシブ教育システム」という文言があり、昨年度の資料にもこういう文言があちらこちらに書かれていました。国の定めに基づいて、県のほうでもこういう理念に基づいた仕組みをつくりたいというこ

とが書かれています。障がいがある人と障がいのない人たちがともに学ぶ環境をそのまま1学級つくれば、例えば、社会福祉科等の学科かコースをつくれば、それで十分障がいのある方もない方も単位が取れるのではないかと、単純に思ってしまいます。

また、おそらく社会福祉の専門家は「伊賀つばさ学園」にしかいらっしゃらないと思いますが、「インクルーシブ教育システム」は、仕組みだけではなくて、その理念もあったと思います。視察に行かれるということですが、委員の我々が仕組みを見に行くというだけではなく、そういうことに詳しい方に20分でもいいので、理念というか、障がいのある人たちとない人たちが、共に歩んで、学んで語るという地域づくりの考え方というのを説明していただけるような場があって、共通認識のうえで仕組みづくりをしましょうという話をしていければ、議論が深まると思います。

杉浦会長

ご提案いただきましたが、いかがでしょうか。その辺も前提にして、委員にご出席いただいていると思います。

事務局（辻班長）

ご意見も含めて、次回以降の進め方を考えさせていただきます。また、それに詳しい委員も当協議会の中にいらっしゃいますので、その方をお願いするかもしれませんし、外部から来ていただくことも考えます。ただ、この時間帯に外部から来ていただくのはなかなか難しいかもしれませんので、ご意見としていただいて、検討させていただきたいと思います。

杉浦会長

今回、伊賀つばさ学園の東直也委員には、ご発言の機会がなかったのですが、次回以降も専門的な分野の協議になると思いますので、委員の皆様の理解が深まるように、またご発言いただきたいと思います。次回以降に向けて、東委員からメッセージ等、何かありませんか。

東直也委員

最後にご質問をいただいた「インクルーシブ教育システム」についてです。「三重県特別支援教育推進基本計画」の中で書かれています。大まかなイメージをつかんでいただくとすれば、委員がおっしゃったように、「障がいのある子と障がいのない子がともに学ぶ仕組みづくり」ですが、まずは、小中学校での話と捉えていただきたいと思います。

「連続性のある多様な学び」ということで、小中学校において「通常の学級」と「通級による指導」、それから「特別支援学級」が、地域の小中学校のシステムとしてあり、地元で障がいのある子と障がいのない子がしっかりと学んでいきたいと思いますという仕組みづくりだとご理解ください。

今も議論されていますが、高等学校の段階になると、入学者選抜というのがありますから、そこで若干システムが変わってきます。昨年度までの経緯の中で出てきたように、教育課程をいかに弾力的に運用するか、ニーズに応じて柔軟な教育課程を設置できるか

という議論に当然なってくると思っています。高等学校も含めて、障がいのある子と障がいのない子すべてがともに学ぶインクルーシブ教育システムという形には、制度的にまだ至っていないというところをご理解いただきたいと思います。

杉浦会長

本日の配付資料の中に入っているのですが、そのようにご理解されたのかと思いますが、この「インクルーシブ教育システム」が提唱されてから取組が進む中で、非常に機能しているところもあれば、実際に生徒の視点に立って新たに見えてきた課題が、現場から指摘されてきているとも聞いていますので、そういったところも折に触れてご紹介いただければと思います。

事務局から提案がありましたように、特別支援教育にかかる先進校への視察調査として、全日制高校の枠組みの中で先進的な取組をされている高校に視察調査を行う予定だということです。入学者選抜で特別枠を設けるという方向性ではなく、例えば、発達障がいのある生徒が聞いてわかりやすい授業は、すべての児童・生徒にもわかりやすい授業だというような授業改善の視点で、日常的な取組が非常に活発にされているような高校から学びとるとということです。この視察調査の結果を踏まえながら、次回以降、協議していきたいと思っています。

協議については、以上でよろしいでしょうか。

10分ほど時間を超過してしまいましたが、本日は、これで協議を終了させていただき、進行を事務局にお返しします。

事務局（宮路課長）

委員の皆様、長時間ありがとうございました。第1回ということで説明がかなり多く、十分にご発言いただけなかったところもあろうかと思いますが、第2回目以降、今回お認めいただいた「平成27年度の協議の進め方」に沿って、また、本日いただいたご意見も踏まえて進めていきたいと思っていますので、よろしくお願ひします。

この後、事務局から諸連絡がありますが、今後とも、当地域の子どもたちの視点で、子どもたちが選んで当地域で学べる環境づくりの協議を進めたいと思っていますので、そういった観点から、ご意見をいただければと思います。

本日は、どうもありがとうございました。

事務局（司会）

最後に、3点、連絡させていただきます。

1点目です。次回の協議会の日程につきましては、11月開催として日程調整等を行いたいと考えていますので、よろしくお願ひします。

2点目です。9月から10月に実施を予定しております先進校視察については、委員の皆様にお願ひも含めて、後日、改めてご案内したいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

3点目です。旅費等について、「旅費・報償費振込口座及び旅行行程申請用紙」をご持参いただいている方で、まだご提出されていない方は、お帰りの際にご提出いただきま

すようお願いいたします。また、学校関係の方につきましては、開催案内に書かせていただきました方法により、旅費の請求をお願いいたします。

以上、3点でございますが、ほかに何かございませんでしょうか。

ありがとうございます。それでは、これをもちまして、第1回伊賀地域高等学校活性化推進協議会を閉会します。本日はありがとうございました。